蘇我馬子の都市計画

－画策は槻の広場でいたすべし－

酒　井　龍　一

大胆な仮説 大胆だけのこと

本稿では、飛鳥での「蘇我馬子の都市計画」（復元素案）を作成[1]。今後の検証に備える。同計画は、「太子道[2]」を介し「聖徳太子の都市計画[3]」と連動する。

飛鳥では蘇我・蘇我・蘇我の風が吹き

飛鳥は蘇我の土地[4]。稲目の子が馬子。妹堅塩の子が推古。蘇我血統の真中に廐戸[5]。蘇我の土地で、蘇我の一人が天皇に即位し、蘇我の二人が政治を支えた。

推古朝 宮・寺・道も西偏す

推古朝（592～628年）、宮も寺も諸遺構も西偏する[6]。飛鳥も斑鳩も、両者を結ぶ太子道（筋違道）も。ポイントは「西偏約20度」である。

588年：飛鳥寺（南北）：馬子
592年：豊浦宮（西偏）推古即位
601年：斑鳩宮（西偏）：廐戸
601年以降：斑鳩寺（西偏）：廐戸
603年：小墾田宮（西偏？）：推古
603年以降：豊浦寺（西偏）：蝦夷
630年：飛鳥岡本宮（西偏）：舒明
639年：百済大寺（南北）：舒明
643年：飛鳥板蓋宮（南北）：皇極
645年：長柄豊碕宮（南北）：孝徳
656年：後飛鳥岡本宮（南北）：斉明
672年：飛鳥浄御原宮（南北）：天武

首都大臣・副都太子の町造り

大臣は政治、太子は外交、頂点に推古。太子の弟の来目（602年）も、異母兄の当麻（603年）も撃新羅将軍。飛

鳥寺も斑鳩寺も、時に「兵站基地」になる。[7]

推古朝 国内外の騒がしく

『日本書紀』は、国家念願の「任那復興詔」(591年) を起点に、「任那攻撃」・「飛鳥都市計画」・「斑鳩都市計画」が連動することを示唆する。

崇峻元 (588) 年　：馬子、飛鳥寺を建設開始。
崇峻四 (591) 年　：天皇詔群臣曰 朕思欲建任那。
崇峻五 (592) 年　：馬子、崇峻を殺害。
　　：推古、豊浦宮で即位。
推古元 (593) 年　：推古、廐戸を摂政とする。
推古八 (600) 年　：新羅を攻撃。
推古九 (601) 年　：任那復興を要請。
　　：新羅征討を計画。
　　：廐戸、斑鳩宮を建設。
推古十 (602) 年　：来目、撃新羅将軍となる。
推古十一 (603) 年：当麻、撃新羅将軍となる。
　　：推古、小墾田宮に遷る。
推古十三 (605) 年：廐戸、斑鳩宮に遷る。

天皇の宮は馬子が用意する

都市枠組は、稲目の小墾田家と向原家が両北端。馬子の河傍家が最奥部中央。蘇我一族の土地に天皇諸宮を確保するのが目的である。

縦型と横型 街を競いあい

飛鳥は南北縦型、斑鳩は東西横型の都市枠組。前者は中軸Y線、後者は中軸X線が基本。地割原理 (方位・地割単位・連結路) は両者共通する。

巻尺の300尺に杭を打ち

地割単位は一町＝高麗300尺≒105.9m。[8]「条坊制」[9]にあらず。用地は、600尺四方 (尼寺)、600×1200尺、(僧寺) 1200尺四方 (宮殿) の3種。飛鳥寺は1200尺四方に組み込む。

推古朝 10と20で町造り

東西10町（3000尺≒1059m）。南北20m町（6000尺≒2118m）。西偏約20度の縦長形。北辺道の北側に１町分（300尺≒105.9m）を付加する。

復元をすれば飛鳥は華やかに！（第１図）

２町枠（600尺）で記す。紫色は主用地。既存の飛鳥寺（用地Ｄ）に加え、方形池（Ｆ）と後日の豊浦寺を示す[10]。推古即位の豊浦宮は豊浦寺下層にある。

Ｙ軸とＸ軸で芯を決め

中央Ｙ軸が東西、中央Ｘ軸が南北に分ける。Ｙ軸上に「仮称 飛鳥縦大路」を設定する。また、Ｘ軸上に区画溝・柵等を設ける。

太子道 太子 大きな杓をもち

飛鳥と斑鳩は太子道で連結。西北端から１町西でＬ字に屈折し、斑鳩へ向かう太子道（筋違路）となる。幅20m強、側溝幅３m[12]と推測される。

飛鳥には馬子闊歩の縦大路

中央Ｙ軸上、雷丘東麓下－用地Ｃ（小墾田宮）－石神・水落間（現西偏小道）－飛鳥寺南西端－用地Ｅ（宮殿用地）－用地Ｆ（方形池：路は左右振分）を結ぶ直線路[11]。

雷の丘を削って路ができ

設計上、北端路は雷丘北裾と低湿地を通る。実際は、雷丘を東西に貫通するバイパスを設定。後日の「阿部山田の前の道－豊浦寺の前の路」（『日本霊異記』）でもある[13]。

来客を池・橋・石でお出迎え

用地Ａ－北端路－雷丘バイパス－縦大路の両側1町は、「饗宴ゾーン[14]」。苑池・橋・導水流水施設・須弥山・石造物・石組・広場・敷石・植樹がある。

用地Ａ：豊浦で即位 推古は急がされ

関門的位置。２×４町の縦長。向原家（稲目：推古成育）→豊浦宮（推古即位）→豊浦寺（尼寺：南半）と変遷する。道路北側に苑池。「豊浦御大臣」＝蝦夷。

用地Ｂ：豊秋日本（とよあきづにほん） 稲目は礼拝す

２町×４町の縦長。小墾田家（稲目：金銅仏）→小治田寺（僧寺）→奥山寺（現在）と変遷。塔の北東120mの井戸から「少治田寺」の墨書土器が出土[15]した。

用地Ｃ：小墾田の宮処を探す僕である

４町四方。小墾田宮。井戸から「小治田宮」の墨書土器が出土[16]。南庭に須弥山と呉橋（『日本書紀』）。西側は沼地。後日、埋め立て。雷丘下に縦大路が通る。

用地Ｄ：馬子君 樹葉（このは）潰して御建立

４町四方。飛鳥寺は既存。半島工人が南北軸で建設。宮殿用地Ｃ・Ｅの間に位置。南門前に敷石広場。寺西側に槻の広場（『日本書紀』）。縦大路が貫通する。

空間地Ｉ：要するに寺と宮とに隙を空け

飛鳥寺と宮殿用地Ｅとの空間地。当面は主施設なし。南北幅は２町。その中間、Ｙ軸に直交するＸ軸上に、溝や柵などの境界施設を設ける

用地Ｅ：新宮殿 次次次とここに建て

４町四方。宮殿用地。後日、飛鳥岡本宮（西偏）→飛鳥板蓋宮（南北）→後飛鳥岡本宮（南北）→飛鳥浄御原宮（南北）が設営される[17]。

空間地２：西向いて大極殿も道もでき

宮殿用地Ｅと居住用地Ｆ（馬子）を隔てる空間地。南北幅２町。当面、主施設なし。後日、岡本宮関連施設（西偏）、更に浄御原宮の東南郭（南北）が建設される。

用地Ｆ：自慢げな嶋を指差す御大臣

最奥部。2×４町の縦長。河傍家（馬子）→嶋宮と変遷。当初、一辺42m、外堤幅10mの方形池を設営[18]。「嶋御大臣」＝馬子。後に、家裏の桃原墓に埋葬される。

用地G：川原の寺は川原にない様子

枠組南半の西端に位置。２×４町の縦長。僧寺用地。川原仮宮（未詳）→川原寺（南北：僧寺）と変遷する。

用地H：橘の寺 窮屈に横を向き

僧寺用地Gに南接。2町四方。尼寺用地。後日、略東西方向で橘寺を建設。方形用地ゆえ、南北軸の寺院建設が難しい。

推古朝 三者揃って幕を引き

推古三十（622）年 廐戸没
推古三十四（626）年 馬子没
推古三十六年（628）年 推古没

わが家の裏 桃原の石舞台

馬子死去。蘇我一族は急遽、墓地用地に結集（『日本書紀』）。異常にも、自宅裏に埋葬。蝦夷・入鹿による蘇我一族誇示の行動と記念物である。

運命の日をば親子はまだ知らず

推古三十五（628）年：蝦夷、山背を推す摩理勢を殺害。
舒明元（629）年：蝦夷の援助で、舒明即位。
舒明二（630）年：舒明、飛鳥岡本宮に遷る。
舒明八（636）年：飛鳥岡本宮は焼失。田中宮に遷る。
舒明十一（639）年：飛鳥を出て、百済宮・百済大寺を建設。
・・・
大化元（645）年：運命の日

一応は追従したがすぐに焼け

推古の次は舒明。蝦夷が即位を支援。岡本宮を、かねて準備の用地Eを中心に建設。西偏枠組（約20度）。西偏用地（約20度）。西偏宮殿（約20度）[19]。舒明八（636）年焼失。

終焉：推古朝過ぎて皆（みんな）は縦を向き（第2図）

舒明の次は皇極。用地E一帯（飛鳥岡本宮）を大整地。西偏枠組の用地を踏襲しつつ、南北軸で飛鳥板蓋宮を建設[20]。以降、南北軸の時代となる。

結果論：飛鳥では大宮殿を積んでおり

今日、用地Eを中心に、Ⅰ期（飛鳥岡本宮：西偏）・Ⅱ期（飛鳥板蓋宮：南北）・Ⅲ－A期（後飛鳥岡本宮：南

北）・Ⅲ－B期（飛鳥浄御原宮：南北）が重複する。[21]

方格地割：先学を信頼すれば鐘が鳴り

後日、飛鳥に「南北方格地割」や「南北条坊制」が実在したか否かの問題は、しかるべき先学の論議に委ねる。[22]

総括：荒唐と無稽集いて策を練り

以上、「蘇我馬子の都市計画」（復元素案）を示した。「聖徳太子の都市計画」（復元素案）と共に、今後の発掘を踏まえ、改良案を作成する。奈文研・橿考研・明日香村の発掘成果に多くを学んだ。多謝。

廐戸と推古馬子で肩を組み
西偏の謎を秘めたる聖方位[23]
画策は槻の広場でいたすべし
奈良大の策士 馬子と比べられ
陰謀に甲乙丙がある神話
誤字当字 わが人生によく似たり！
飛鳥幻想！ さてこのへんでペンをおく

桃原の墓を眺めるワンカップ　龍一

【註】

（1）積年の発掘は、奈良国立文化財研究所（奈良文化財研究所）・県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会が担当され、多様な報告書類や論文が出ている。明日香村編2006年『続 明日香村史』（明日香村編2006年）はその要約と言える。

（2）後日、別稿「太子道歩けオロジー」を用意する。

（3）拙稿2006年「聖徳太子の都市計画」『文化財学報 第23・24集』奈良大学文化財学科

（4）大脇潔1997年「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社

（5）石田尚豊編1997年「聖徳太子関係系図（折込）」『聖徳太子辞典』柏書房。

（6）次の文献も参照されたし。田辺征夫2005年「方格地割都城と方位に関する若干の覚書」『飛鳥文化財論攷』納谷守幸氏追悼論文刊行会。

（7）実際、飛鳥寺は、皇極4（645）年、中大兄皇子により「城」として使われた（『日本書紀』）。斑鳩寺も、「兵站基地的な性格の濃い施設」との見解がある。鈴木嘉吉2006年「法隆寺の造営－聖徳太子の夢」『法隆寺の謎：法隆寺の創建・再建年代を考える』朝日新聞社・帝塚山大学。

（8）「高麗300尺≒106m」の先駆研究は、飛鳥では岸俊男1970年「飛鳥と方格地割」『史林 53－4』史学研究会。斑鳩では岩本次郎1983年「斑鳩地域における地割の再検討」『文化財論叢』同朋社出版。最近では、黒崎直2005年「飛鳥の方格地割とその範囲」『飛鳥文化財論攷』（前掲）・2007年『日本史リブレット71 飛鳥の宮と寺』山川出版社。

（9）推古朝、飛鳥の地割案には、「約106m」と「約132m」の単位寸法があり、後者は道路幅を考慮する「条坊制」である。黒崎直（前掲8）。

（10）第1図・2図は、『大和国条里復元図』（県立橿原考古学研究所編）の「88・94」をベースマップとし、奈良文化財研究所2002年『飛鳥・藤原京展－古代律令国家の創造－』朝日新聞社の「飛鳥地区の詳細図」（181頁）、林部均2006年「飛鳥宮を考える－その調査の成果と課題－」『飛鳥宮を考える』（第24回奈良県立考古学研究所公開講演会）県立橿原考古学研究所

の図４（２頁）、『続 明日香村史 上巻』（前掲１）の「豊浦寺調査区位置図及び伽藍復元図」（292頁）などから、主要施設をおおよその位置に嵌め込んだもの。

(11) その確認は重点目標である。私見では、「山田道 第２・３次調査」の最西端、石敷き（SX2633）の位置に「中軸縦大路」を想定する。ここは地山面が残るが、西側は急斜面で、広範な湿地帯となる。奈良国立文化財研究所1991年『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 21』。湿地帯は、後日、埋立事業がされる。南方では石神・水落遺跡の中間（現在の西偏する小道）に想定する。

(12) 唐古・鍵考古ミュージアム2006年『太子道の巷を掘る』。拙稿2008年「斑鳩歩けオロジー」『王権と武器と信仰』（菅谷文則編）同成社

(13)「雷を捉る縁 第一」『日本霊異記』（2001年『新 日本古典文学大系』岩波書店）

(14) 後の石神遺跡・水落遺跡に続く。

(15)「井戸SE150」出土。1978年「奥山久米寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報８』奈良国立文化財研究所

(16) 明日香村教育委員会1987年『明日香村内発掘調査実績（昭和62年度）』・1988年『雷丘東方遺跡第３次発掘調査概報－村道耳成線道路改良事業に伴う調査』。

(17) 最近の研究は、次の文献に詳しい。林部均2001年『古代宮都形成過程の研究』青木書店。・2003年「飛鳥の諸宮と藤原宮の成立」『古代王権の空間支配』青木書店。小澤毅2003年『日本古代宮都の研究』青木書店。林部均2006年「飛鳥宮を考える－その調査の成果と課題－」『第24回奈良県立橿原考古学研究所公開講演会：飛鳥宮を考える』県立橿原考古学研究所。黒崎直2007年『日本史リブレット71 飛鳥の宮と寺』山川出版社。

(18) 明日香村教育委員会2005年『嶋庄遺跡』（明日香村の文化財⑥）・卜部行弘2008年「飛鳥嶋庄遺跡についての覚書」『王権と武器と信仰』（前掲12）。

(19) 例えば、最近では、用地E中心部の最下層の「建物３」。県立橿原考古学研究所2006年『飛鳥京跡第155次調査－内郭中枢の調査2005－』。その他、各所。

(20) 前掲（10）と同じ。

(21) 豊浦寺・川原寺・橘寺が一直線に並ぶ理由、エビノコ（東南郭）郭や橘寺の位置や東西を向く理由、新諸宮殿の位置関係、石神・水落遺跡の位置と性格、小墾田寺（僧寺）と川原寺（僧寺）の寺域が縦長の理由、豊浦寺（尼寺）と橘寺（尼寺）の寺域が小さい理由等を説明できると考えている。

(22) 最近では、南北方格地割の存在を黒崎直2005・2007（前掲８・17）が主張。井上和人2004年『古代都城制条里制の実証的研究』学生社は否定する。

(23) 栗本慎一郎2005年『シリウスの都 飛鳥』たちばな書房